福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

福井の生活と生活保障

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5140

第4章

福井の生活と生活保障

高田　洋子

1　私たちの生活と生活保障

私たちの生活では社会化が進行している。

私たちが毎日を大過なく過ごしていくために必要な消費財や基礎的生活基盤は，どのように用意され維持されているのだろうか。自らの知恵と力だけで済む部分はさほど多くはない。社会学の武川正吾は「社会サービスの供給体制」を以下のように分類している。主として福祉サービスに関わる議論であるが，「社会サービス」を広く考えれば生活全般に応用できる（武川正吾　1992）。

1　インフォーマル・システム：核家族，親族，近隣，友人などが互いに助けあう援助のシステム。

2　法定システム：中央政府や地方政府を通じて社会的必要を充足するシステム。

3　営利システム：民間企業が商品として財やサービスを販売（供給）するシステム。

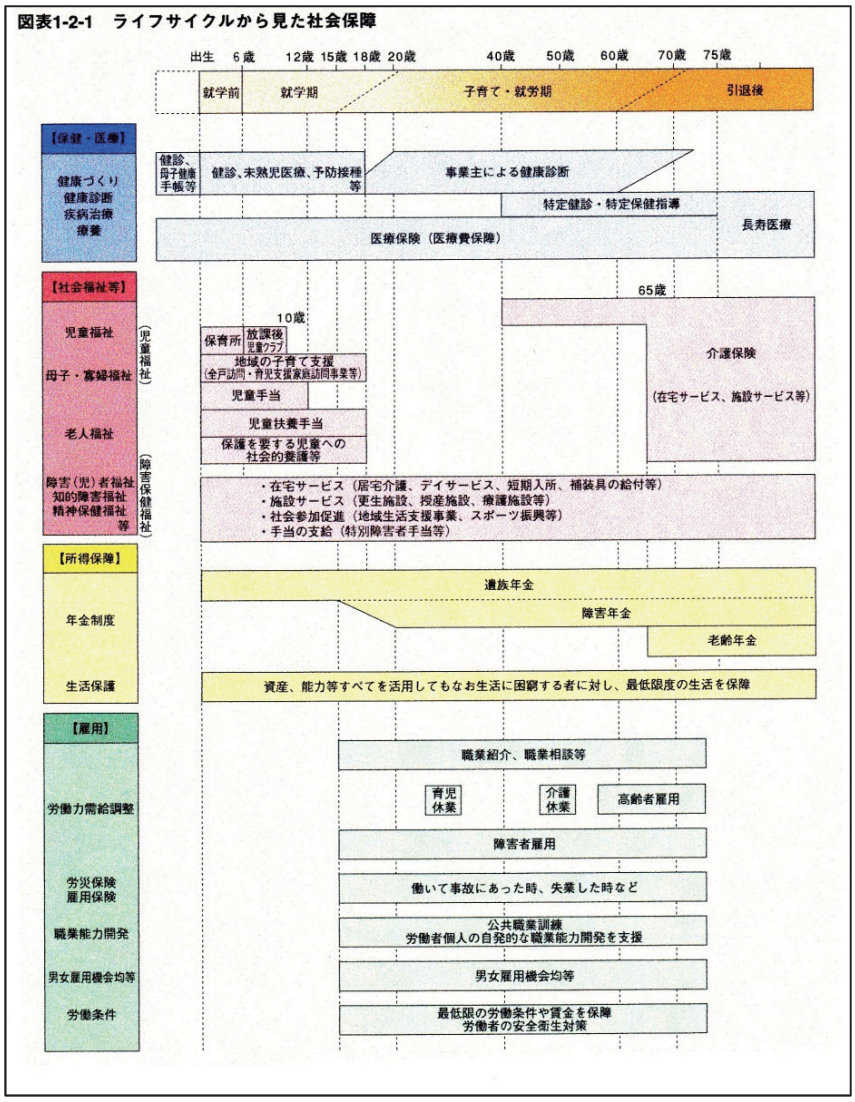
4　民間非営利システム：諸個人の自発的活動を基礎にした社会サービスの供給のシステム。

全体的にはインフォーマル・システムに依存する度合いが少なくなってきていると理解される。「生活の社会化」と言われる。世の中での社会的分業が広く深く展開してきたことによる。他の力に依存し，自らの力で他を支える生活が，身近な世界を超えて，時間距離の短縮とメディアを媒介に，さらに広がっていることを示している。たとえば，食生活で考えれば，商品化が進んで，外食やお総菜を活用する中食が増えているし，食材の宅配や調理食品・弁当の配食サービスも広がっている。家庭廃棄物の収集サービスは自治体が広く取り組んでいる。衣生活はとっくに既製品を購入し利用する形に変わっている。子育ての領域では，支援サービスが整い保育所や学童保育の場も増えている。働く親たちのためだけではなく，家で子育てに専念している親たちに対するサービスも始まっている。介護の世界では 2000 年に介護保険制度が導入されて介護の社会化が進

んだ。

私たちの人生や生活の危機は，事故や病気，失業，災害，離婚など，さらに結婚，子育て，住宅取得，介護，葬式などライフイベントも加えれば，誰にでもいつでも現れる。それらを乗り越えるための社会サービス，つまり生活保障のしくみは，インフォーマル・システムだけでなく，民間企業が提供する各種商品が用意されているし，加えて社会保険の仕組みを中心にしながら公的なサービス（「法定システム」）も整備されている。次の図は，平成 22 年度版「厚生労働白書」に示された公的サービスの簡単な一覧で，人生の時期別に，子育て期の支援サービスや，高齢期の年金や介護保険，生涯に続く医療保険などが示されている。

図１　生涯にわたる社会保障



（資料出所：平成２２年度版「厚生労働白書」**P16**）

2　福井の生活と生活保障の課題

■福井の生活

生活や生活保障の基本は日本中同じであるとしても，国内各地域にはそれぞれの社会的特質もみられる。福井では「福井県勢要覧平成 23 年版」（福井県）などをみると，次のようなことが指摘されている。

・「三世代家族」の比率が全国平均よりも高く，家族規模も全国平均より大きい。

・夫婦の働き方として「共働き」が全国平均よりも多い。

・持ち家比率が全国平均値より高く，住宅面積も全国平均より大きい。

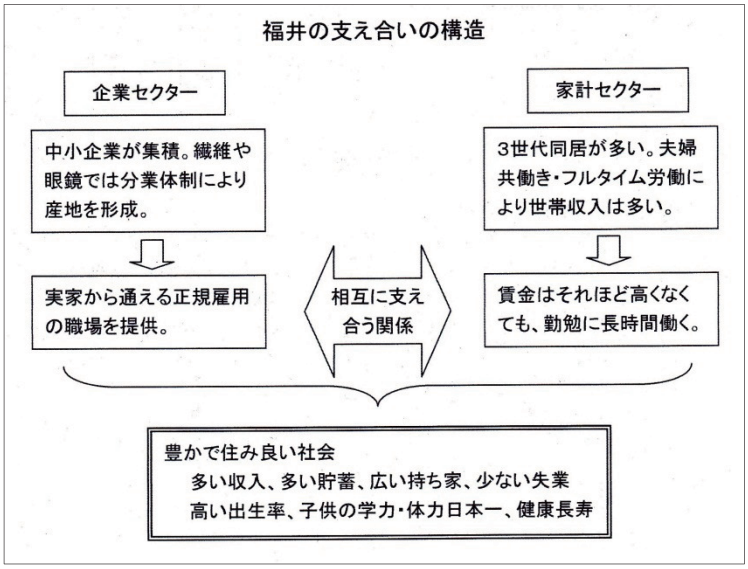
・平均寿命は上位にあり，子どもの学力テストの成績も良い。

・合計特殊出生率が高く，離婚率は低い。

高齢者は長生きし，祖父母に子どもを預けて働く母親の姿が言及されることも多い。安定した家族像が描かれる。

日本銀行福井事務所の「特別調査資料・福井県経済の構造分析と戦略」（2011 年 11 月）には次のような図が載せられている。

図２　福井の支え合いの構造



つまり「支え合いの構造」とその安定性が福井の特質とされていて，先の「社会的サービスの供給体制」で考えてみれば，「インフォーマル・システム」がよく機能している社会とみられている。

この図にもあるように，地域経済のありかたに特徴があり，これは，農業生産を中核的に展開する基礎が弱く，一方で京阪神に近い立地も生かした製造業が過去から広く展

開してきた歴史的地理的事情が背景にある。繊維産業や地場産業が，中小企業ではあるが，高い技術を伴って，近隣の人々の雇用市場を提供しながら立地しているのは大きな特徴である。家内工業的な企業経営の持続は「家」の価値を残している大きな背景であり，家の構成員の総働きで家の持続を図り，そのことで個々の人々の人生と生活を保障してきた歴史と経験は，今も福井の人々の暮らし方を支えているようにみえる。

■福井の生活保障の課題

ここで述べた構図や解釈は福井の人々によっておおかた支持されているように思われる。ただ考えてみるべき点が幾つかある。

１）若者を中心に県外への流出が続いている。

福井の若者が県外に流出する傾向にあることが指摘されているし，図 3 にみるように人口の転出超過は持続している。他県と比べると，「合計特殊出生率」がやや高く，ゼロ歳児の平均余命（つまり平均寿命）が長いという傾向にもかかわらず，人口の自然増で補いきれず，県の総人口は減り始めている。県の総人口は，1980 年に 794354 人，2000 年に 828944 人，2010 年に 806314 人と移行している。

図 3　福井県の社会移動（転入と転出）

（資料は「住民基本台帳人口移動報告年報　平成 21 年」（総務省））

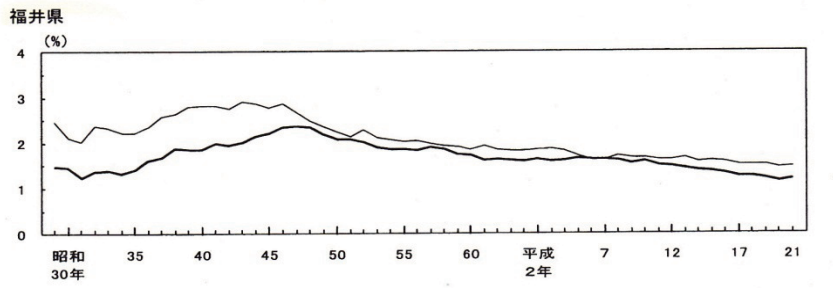


図 3 では，グラフの上の線が転出割合，下の線が転入割合を示している。一貫して転出割合が高い。社会減が昭和 30 年代から続いていることがわかる。2010 年の福井県の移動状況を総務省の「住民基本台帳人口移動報告年報　平成 22 年」でみると，転入者数 9058 人，転出者数 10468 人で，1410 人の転出超過になっている。また年齢階層別にみると，転出超過数の多い年齢は，22 歳，18 歳，20 歳であり，この 3 つの年齢で 890 人の転出超過になっている。学校を出て就職する時点で県外に出ている。

年齢階層別の人口でみると若年層の比率が全国平均よりも低い。2010 年国勢調査で，

20 代および 30 代の人口を比較してみると，福井県は 22.2%，全国は 24.9%となる。

このような傾向はなぜなのだろうか。

学卒で得られる職場が少ない，また進学すべき高等教育機関が少ないという事情があるのだろう。求人倍率は全国的に見れば低い方ではない。若い人々が求める職種ではないということだろうか。将来環流するのであればまだしもであるが，県の資料では結局社会減に結果している。多くの周辺地域と同じ傾向を示し始めている。「毎年約 3000 人の若者が県外に進学しています。しかし，県の推計では，県外に出た若者が就職時にふるさとに帰ってくるのは，そのうちの約 1000 人程度にとどまっています。」（福井県民の将来ビジョン，p24 ）と総括されている。対策としては「幼少時からのふるさと教育」が提案された。魅力ある地域社会であること，職場が用意されることなど，幾つかの対応策が求められている。

２）高齢者の生活支援は今後さらに必要になる

高齢者の多くが家族や地域社会の中で居場所や役割を得て元気に暮らしている福井県といわれているが，そういう高齢者ばかりではないことも看過すべきではない。

高齢者の家族生活を考えてみると，幾つかのタイプに分かれる。高齢者が単身で生活する世帯，高齢者夫婦のみの世帯，若い世代と暮らす世帯の中でも未婚子と暮らす世帯，三世代世帯で暮らす高齢者の世帯など。福祉施設などで暮らす高齢者もいるし，自宅で暮らす高齢者もいる。

福井ではどうだろうか。

65 歳以上の高齢者の県人口に対する割合は高くなっている。1980 年に 11.5%であった割合は，2010 年には 24.9%となり，2035 年には 34%になることが予測されている。高齢者の生活の変化にあわせた生活支援のしくみがどの程度に整備されるかは，高齢期の生活の快適さを決める。とくに，少しずつ比率を増し今後さらに増えると予想される高齢期の一人住まいや高齢期夫婦のみの生活においては，家族の近居あるいは有用な社会支援サービスの仕組みが整っていない場合には，生活の困難の可能性がみえてくる。福井の高齢者は，最近では表 1 のような家族生活をおくっている。

表1　65歳以上の人の家族生活

全国	1990		2000		2005	
総人口	123,611,167		126,925,843		127,767,994	
65歳以上の人口	14,894,595		22,005,152		25,672,005	
(同上比率，対総人口)	12.0		17.3		20.1	
一般世帯人員	14,254,489	100.0	20,981,161	100.0	24,294,286	100.0
親族世帯	12,613,705	88.5	17,914,461	85.4	20,379,012	83.9
核家族的世帯	5,641,505	39.6	10,613,572	50.6	13,369,229	55.0
夫婦のみ世帯	3,592,154	25.2	6,809,326	32.5	8,367,891	34.4
未婚子のいる世帯	2,049,351	14.4	3,804,246	18.1	5,001,338	20.6
その他の親族世帯	6,972,200	48.9	7,300,889	34.8	7,009,783	28.9
うち，三世代世帯	5,132,567	36.0	5,586,508	26.6	5,106,261	21.0
非親族世帯	17,351	0.1	34,560	0.2	50,496	0.2
単独世帯	1,623,433	11.4	3,032,140	14.5	3,864,778	15.9
施設等の世帯人員	640,106		1,023,991		1,377,719	
うち，病院・療養所の入院者	388,089		528,306		539,004	
うち，社会施設の入所者	246,713		484,723		825,948	
(同上比率，対65歳以上人口)	1.7		2.2		3.2	

福井県	1990		2000		2005	
総人口	823,585		828,944		821,592	
65歳以上の人口	121,940		169,489		185,501	
(同上比率，対総人口)	14.8		20.4		22.6	
一般世帯人員	116,158	100.0	159,486	100.0	173,511	100.0
親族世帯	107,248	92.3	144,547	90.6	155,246	89.5
核家族的世帯	29,128	25.1	56,462	35.4	69,890	40.3
夫婦のみ世帯	18,945	16.3	36,565	22.9	44,031	25.4
未婚子のいる世帯	10,183	8.8	19,897	12.5	25,859	14.9
その他の親族世帯	78,120	67.3	88,085	55.2	85,356	49.2
うち，三世代世帯	61,287	52.8	72,455	45.4	67,561	38.9
非親族世帯	67	0.1	149	0.1	245	0.1
単独世帯	8,843	7.6	14,790	9.3	18,020	10.4
施設等の世帯人員	5,782		10,003		11,990	
うち，病院・療養所の入院者	2,913		5,187		4,827	
うち，社会施設の入所者	2,852		4,789		7,120	
(同上比率，対65歳以上人口)	2.3		2.8		3.8	

資料）国勢調査。

2005 年の調査では，65 歳以上の高齢者で，一人暮らしの人が 18020 人（一般世帯で暮らす人の 10.4 %），夫婦のみで生活する人が 44031 人（同じく 25.4 %）であった。1990 年以来確実に増えていて，2010 年の抽出集計をみると，表掲はしなかったが，さらに増えている。この表には「社会施設の入所者」も載っていて，この人々も確実に増えている。生活支援を他から要する人々は確実に増えてきていることがわかる。全国動向と比べると，福井県は他県と比べると三世代世帯比率がやや高いが，この割合も低く

なってきており，全国の動向をやや遅れて追っていることが表から理解できる。何もなければ全国的な課題はいずれ福井県の課題になるであろう。

高齢者の介護が必要になったときには，その子を中心にした家族介護が期待されるわが国であるし，そのモデルのようにいわれる福井県であるが，子が同居したり，近所に住むような形は，今後もさらに持続することを想定するのは相当に困難である。家として生業を持っている時代は過ぎ，家族構成員はそれぞれの職業を全国的労働市場の中で選択していく時代になっている。また同居しているとはいえ，未婚子あるいは共働きで働き続けている同居子家族にとっても，社会的な介護の必要はますます増えるものと思われる。介護保険制度の導入はその一環である。

3）女性たちは忙しい

福井の女性は「働き者」である。次のような指標から指摘される。

・女性労働力率　2005 年　53.5%　全国　48.8%

・30 代女性の労働力率（M 字カーブ）　2010 年　81.9%　全国　66.9%

・女性雇用労働者の平均勤続年数　2010　10.5 年（男性　12.9 年，全国女性 8.9 年）

・女性雇用労働者の平均年齢　2010　41.5 歳（全国女性　39.6 歳）

・夫婦共働き世帯の比率　2005　58.2%（全国 44.4%）

表2　30歳代の労働力率（福井県，全国，2010）

福井県(千人)	女性				男性			
	総数		30代		総数		30代	
15歳以上人口	359.9	100.0	50.7	100.0	330.0	100.0	52.7	100.0
労働力人口	199.2	55.3	41.5	81.9	242.9	73.6	51.9	98.5
就業者数	194.7	54.1	40.7	80.3	234.0	70.9	50.2	95.3
完全失業者数	4.6	1.3	0.9	1.8	8.9	2.7	1.6	3.0
非労働力人口	160.4	44.6	9.0	17.8	86.8	26.3	0.8	1.5

全国（万人）	女性				男性			
	総数		30代		総数		30代	
15歳以上人口	5712	100.0	889	100.0	5337	100.0	913	100.0
労働力人口	2768	48.5	595	66.9	3822	71.6	881	96.5
就業者数	2642	46.3	563	63.3	3615	67.7	839	91.9
完全失業者数	127	2.2	32	3.6	207	3.9	43	4.7
非労働力人口	2940	51.5	293	33.0	1512	28.3	32	3.5

注）福井県は「福井県労働状況調査」(2010)，全国は「労働力調査」(2010)。

これらのことは高い評価を得ているし，女性自身がそのことを誇りに思っている。女性が生き生きと働いていることを示している。しかし，その分忙しく自分の時間が確保できていない現実がある。このことは男女共同参画の理念とは独立である。自分で自分の人生を決められているだろうか，自分自身のために使える時間を確保できているであろうか。福井県による男女共同参画に関する調査に関する塚本利幸の報告では，時間の確保について次のように述べられている。女性が，家庭生活や職場，地域社会などの重要な決定に関与できていない実情が紹介され，その理由に関し，「回答率が過半数を超えた項目は，「男性優位の組織運営」と「家事などで時間の余裕がない」の 2 つであり，ここでも，時間的な余裕のなさが，女性が重要な方針決定過程に関与する上でネックになっていることが示されている」と述べている（塚本利幸，2011，p52）。また「家事の忙しさは，社会活動や余暇活動，休養のための時間をとりにくくしている。共働きが多い福井県で，日常的な家事の両性間での分担が進まず，女性が賃労働と不払い労働の二重負担を強いられていることの影響は大きいといえる」としている（同上，p58）。

子育てや介護，また衣食住に係わる家事労働の担い手，つまり家の中のことの担い手として期待される女性たちは，その部分への支援を得ることなくしては，忙しくかつ心身への負担を知らず引き受けることになろう。福井は，家にあるいは家の近くに祖父母がいて，一部を負担してもらえると言われる。総働きで家を維持してきた名残といえるが，今後も持続できるかは不安定であるし，そうできている「嫁」がどのくらいいるかも確かではない。

生活保障との関連で言えば，相対的にインフォーマルな相互支援に特質がみられる福井であるが，今後の持続についてやや不安があり，維持するための工夫が提案されている。福井の特質が誇りとして伝えられ，自ら納得していくことが期待されている。しかし閉鎖的といわれ交流も少ないと評価される福井県であっても，労働市場の広域化の中で，他県と比べればやや多めに生まれた若者も多くが県外へ向かうし，長寿化とともに高齢者だけの生活が増えることも予想されるし，家を任されたままに外での働きも期待される女性たちの人生の多様化も今後は必然であろう。子育て支援や高齢者の生活支援の工夫は，これまで以上に求められることになる。家族や地域社会にのみ期待したままでは，社会的支援の整備が遅れるのではないかと心配になるし，高齢者の生活保障の水準が低下するだけであろう。

3　学生と考えた地域課題

高齢者は地域で多くの人々と係わりながら暮らしている。人は加齢とともに少しずつ心身が弱ってくる。高齢者のみの世帯や，昼間家族が働いていて一人になる高齢者も，周りの人々の見守りあるいは日常生活の少しの支援があれば，これまでどおり暮らしていくことができる。ここでは，福井での高齢者の生活と生活保障に係わる地域課題に関して，学生たちと取り組んだ２つの事例を紹介する。越前市ほか県内で行われている配食・会食サービスの実態調査と大野市のある地区を対象にした高齢者生活における相互の支え合いの様子を調査した事例である。

■配食・会食サービスの実態調査

2007 年度の「生活経営学ゼミ」で１年間をかけて取り組んだ学習事例である。最後に創った報告書に高田が書いた「あとがき」を以下に載せる。学習の経過がわかる。

「生活経営学ゼミは，毎年３年生を主体に構成され，毎日の生活の中に見いだされる生活課題をとりあげ，理論的にまた実践的に学習する機会を創っています。昨年は介護保険をとりあげましたし，今年は配食サービスを主題にしました。高田がこの１０年ほど高齢者の生活問題を制度的政策的な面から整理するとともに，社会生活上の相互支援のありかたについて，市民活動の領域で幾らか実践的な関心をもって取り組んできたこともあり，今回この主題で学習することになりました。県内各地の実践例に学ぶことは，やや忙しい３年生には大変な面もありましたし，成果としては今少し求めたい部分もありますが，ある主題の学習研究に主体的にまた協働で取り組む機会はそう多くなく，良い経験になったのではないかと考えています。

老人給食サービスは，生活上もっとも基本的な快適さの確保に関わり，地域福祉サービスの展開を考える上では有用なものの一つと考えています。地域福祉の展開には，医療，介護，生活それぞれの面で，在宅生活への支援の仕組みの確保が重要であるとともに，見守りと連絡の仕組みづくりが必要で，それは日常的な市民の参加を要請します。その点で，老人給食サービスは，高齢者の食の確保にとどまらず，配達時のことを思い浮かべると，見守りの大事なチャンスにもなっていて，有効なサービスの一つかなと思います。昨１２月には，全国老人給食協力会の地域大会が福井市で開かれ，学生ともども良い諸経験を聞くことができました。

学生たちのこの学習研究成果を出発点に，学生のみならず多くの方々に老人給食サービスの意義また考えるべき宿題が伝われば良いなと思っています。

県内各団体には大変お世話になりました。ややぎごちない学生たちの申し出に教育的な配慮もいただき，感謝申し上げます。ありがとうございました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

［今年度のゼミ］

平成１９年

４月～　７月　高齢者等の生活について，基本的学習

１０月～１１月　調査企画

配食サービスについての基本的学習

各団体のホームページの閲覧や電話による調査

訪問調査の計画

１２月～　１月　訪問調査

１月～　２月　本報告書の作成

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

平成２０年２月１０日

高田洋子　」

全国老人給食協力会の大会が福井市で開かれたのは良い機会で，学生は報告をさせてもらい，また大会当日の作業を手伝った。主題を老人給食サービスにしたのは，高齢者の生活介護にとっては有用なサービスであることによる。当時は介護保険制度の中のサービスには組み込まれておらず，将来を考えてのことでもあった。訪問調査は学生が分担して行い，配る食事や創る過程を写真に撮らせてもらい，インタビューをし，弁当づくりに参加させてもらったり，幾つかは配食先まで同行した。最後に報告書を創り調査先や関係の人々に配布した。

次に，報告書の中で調査結果を載せたある頁を以下に示す。

■大野市での高齢者生活調査

福井大学による『福井大学と大野市の連携事業（平成１５年度，１６年度）』に応募し，「支え合いのマップ作りを通した住民福祉のまちづくり」という表題で，大野市をフィールドに２カ年にわたって研究を行った。大学側は高田ともう一人の教員が担当し，卒論を書く学生を中心に一緒に活動した。大野市側は市民十数人が学習会（「スローな福祉の会」）を組織して，この活動に参加した。NPO で高齢者のデイサービス活動をする専門職を含む人々や市職員，また関心を持つ人々で組織されていた。

市街地にある一つの町内を研究対象に選び研究を行った。この町内は一般的な住宅地で，NPO によるデイサービス施設があり，近くには古い商店街がある。住民への最後の報告会で用意したリーフレットにしたがって，以下，研究活動の内容を紹介したい。

活動内容について，以下のように載せた。

「主に行ったことは，３つです。

１）高齢期の皆さんが，日常的にどのように支え合いながら生活をされているのか，その実際を知ること，これは何人かの方に，地域の地図を前にしながらお話を伺い，支え合いの関係の地域的な広がりを確かめる方法で行いました。

２）地域の皆さんに呼びかけお集まりいただいた何人かの人たちに参加していただき，スローな福祉の会とお話し合いの場を持ちました。日常的にどんな社会関係の広がりがあるのか，どんな生活をされているのか，これからどんなことが求められているのか，といったことが主要な内容でした。

３）最近行ったことですが，地域の皆さん（大人の方）にアンケートをお配りして，生活上の不安や，今必要と思われる地域の施設がなんであるのか，といった内容について，お考えをうかがいました。」

実際どのような地域社会関係があるのか話し合ってみると，多様な内容が挙げられ，また具体的に地図上に描くことができた（次頁の図）。

・どこかに集まる→自宅，カラオケ，店，公園等

・一緒に楽しむ　→おしゃべり，花づくり，踊り，カラオケ，お風呂にいく等

・助け合う　　→買い物・ゴミ捨て・雪かきを手伝う，おすそわけ，
　一緒に車ででかける，自宅をサロンにする，話の聞き役になる等

・見守っている　→サロンにいつもくる人が来ないと見にいく，
　朝，カーテンが空いているかみている，
　夜，部屋に電気がついているかみている，
　いつものように店を開けたかみている等。

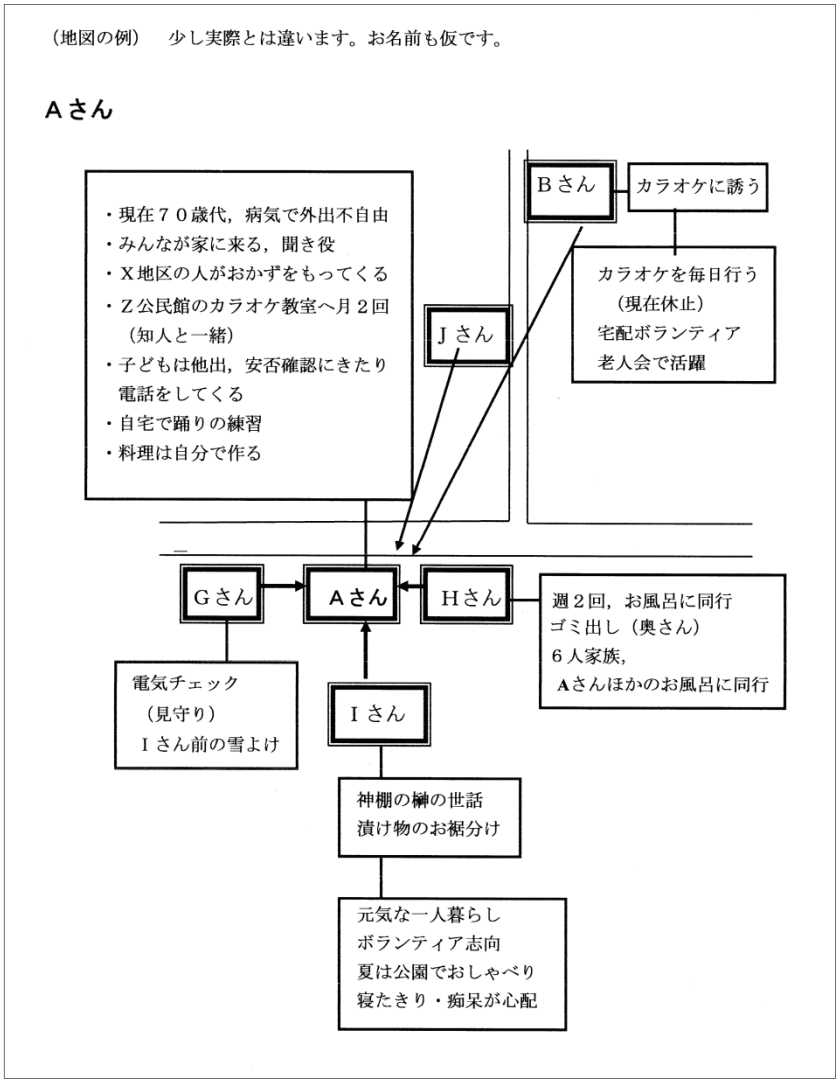
さらに希望を聞くと，集まる場所や相談のできる場の確保が重ねて出され，サービスに関する情報が欲しいことも出された。コミュニケーションへの望みは大きく，やや孤立した生活になりがちであることがわかる。

アンケート調査で用意した質問は，項目としては次のようなものだった。町内の 230 人に，町内会の協力を得て配布し回収した。

・高齢期の生活について　　生活不安の有無
　　生活不安の内容

	仕事から引退後の生活への期待
・子育てについて	子育ての不安の有無
	子育ての不安の内容
・地域社会と生活	地域での災害に関わる話し合い
	地域内の危険箇所の把握
	地域に期待する施設

70 歳以上層での生活不安は，健康でいられなくなったときに，どこで暮らせるのかが不安だという回答が多くなっていて，生活保障の基礎的部分が不安の対象になっていることが示された。また引退後の生活への期待を聞いた質問では，50 歳以上の方々では「畑仕事をしたい」が目立っていた。



アンケートの最後で聞いた「地域の課題」はまとめると次のようになった。

「幾つかに内容をまとめてみると，次のようになります。

イ）ふだんからの相互のつきあいやふれあいの機会を大切にしよう。
　お互いのことを考えた，気遣いのある雰囲気を創ろう。

ロ）忙しい時代にもなったのだから，より合理的，効率的，実質的に仕事が進められるよう，町の仕事や行事，そのための組織を見直そう。

ハ）子どもや高齢者の居場所，子どものことで気軽に相談できる場所を創ろう。
　身近な医療施設（総合病院など）の設置を考えよう。
　町内の情報交換が簡単にできる仕組み（ＨＰなど）を考えよう。
　雪捨てに苦労しない町にしよう。きれいな町にしよう。

ニ）高齢期の不安（年金，仕事，健康，家で暮らせる環境など）を少なくしよう。
　子どもの教育（しつけ）をもっと考えよう。
　安全なまちづくりを進めよう。」

高齢者問題をとりあげ検討する中で，地域の課題を考えることができたと思われる。

4　まとめ

主として高齢者のことをとりあげて，生活と生活保障のことを考えてきた。福井の高齢者は，三世代家族の中で役割と居場所を得て，広い住宅の中で幸せに暮らしていると言われている。しかし，誰もがそういう事情を得られるわけではなく，個々の事情に即して考えなくてはいけないし，三世代家族の中で忙しく立ち働く女性たちの姿も正面から見つめる必要がある。そして今後，家族や地域社会の今の「良い」事情を持続することが，どのように可能なのかを考えたときに，より広く社会的に私たちの生活を支えていく仕組みを作っていく必要があるように思う。家族や地域社会だけに頼らなくても快適に生きていける社会を用意する必要がある。それはすでに多くの国内外の地域で始まっている。優れた先行事例を謙虚に学ぶ必要がある。

参考文献

武川正吾　1992　福祉国家と市民社会－イギリスの高齢者福祉－　法律文化社

厚生労働省　2011　厚生労働白書　平成 22 年版

日本銀行福井事務所　2012　特別調査資料・福井県経済の構造分析と戦略

スローな福祉の会　2005　老いても安心して暮らせるまちづくり－大野市春日三丁目上区で考える－（『福井大学と大野市の連携事業（平成１５年度，１６年度）』報告書－支え合いのマップ作りを通した住民福祉のまちづくり－）

福井大学教育地域科学部生活経営学ゼミ　2008　福井県の配食サービスについての報告書

総務省統計局編　2010　住民基本台帳人口移動報告年報　平成 21 年，同 22 年

総務省　国勢調査および労働力調査　各年版

福井県　2011　福井県勢要覧　平成 23 年版

福井県　2010　福井県民の将来ビジョン－「希望ふくい」の創造－

塚本利幸　2011　女性の方針決定過程への関与と時間的な制約の関係についての考察－女性就業率高位の福井県を事例として－　日本ジェンダー研究 14

福井労働局雇用均等室　2011　グラフで見る福井県の女性労働

おすすめ図書紹介

① 暉峻淑子　2003　豊かさの条件　岩波新書

「格差を広げる競争万能社会に対抗して『もう一つの社会は可能だ』という市民の声が世界に満ちあふれつつあるのは確かだ」として，本当の豊かさを生きる人々を国際的な視野で描いている。

② 春日キスヨ　2010　変わる家族と介護　講談社現代新書

「家族の形が大きく変わってきたことによって，家族に『セーフティネット』を担わせる形で作られてきている日本の福祉制度のありかた」が「限界」に達したことを，多くのケア現場の事例によって語っている。

③ 熊沢誠　2000　女性労働と企業社会　岩波新書

「あまり『平等』を語ることなく恵まれない労働にたずさわるノン・エリート女性たちの，言いようのない不安やしんどさ」を豊かな資料で語り的確な理論枠組みで位置づけている。